〔論　文〕

シャカの神格化について（五）

――大乗佛教・大般涅槃経(二)――

小畑　進

五、大乗佛教・大般涅槃経〈二〉
序　大般涅槃経と佛身論　……　前号
(1)　無常垂示の思想　……　167
i　工匠チュンダの嘆願　……　167
ii　寿命無量と雖も　……　168
iii　諸行に同じうすべからず　……　169
iv　二施の果報等しくして　……　171
v　諸佛の法爾なり　……　172
vi　衆生を化せんが為に　……　174
vii　起ちて結跏趺座す　……　175

viii　無常垂示のために　……176
ix　キリストと無常垂示　……178
x　イエス・キリストの死　……179

(1)　無常垂示の思想

i　工匠チュンダの嘆願

有為転変は現世の相、愛別離苦は悲しき現実、生者必滅は不可避の運命とは言いながら、大聖シャカが忽然として死滅するとは耐え難い。たとえ、シャカ本人は、その生涯になしえた行蹟に感謝と喜悦を覚えて、死はなんら意に介するところ無しとしても、弟子たちはシャカの教法のみか、その肉体も不滅でなければならぬ、と思わざるを得なかった。

この師を失なえば、

世間は虚空となり、世間は虚空となれり。我等今より救護(くご)有ること無く、宗仰するところ無し。貧窮孤露にして、一旦無上世尊に遠離せば、もし疑惑有らんとき、まさにまた誰にか問ふべき。(序品第一・一。大正一二・六〇五、以下略)

と嘆く。

＊阿含の『涅槃経』では、一年前から説きはじめられているのに対して、この大乗の『涅槃経』は、いきなり二月十五日、入滅当日の朝からの一日の出来事として語られている。

このシャカに最後の供養をゆるされた拘尸那城（くしながら）の工匠の子純陀（ちゅんだ）（Cunda・妙義）は、『涅槃経』の舞台まわしの役をつとめて、シャカの延命をこいねがう。

佛智よくよく我等が無明の闇を断じたまふ。けだし日出づる時、雲を除き光あまねく照らすが如し。如来よくよく一切諸々の煩悩を除きたまふ。けだし虚実の中、雲起りて清涼を得るが如し。この諸々の衆生等、恋慕して悲慟を増し、悉く皆生死の苦水に漂はさる。是を以ての故に世尊、衆生の信を長じ、生死の苦を断ぜんが為に、久しく世間に住したまふべし。（純陀品第二・六）

と。残念切々たるものがある。

ii　寿命無量と雖も

これに対して、シャカの語るところは〈諸行無常〉の法印であった。

一切の諸々の世間、生ずる者は皆死に帰す。寿命無量と雖も、要必ず終尽有り。それ盛んなる必ず衰ふること有り。合会は別離有り。壮年久しく停らず、盛色、病に侵さる。命死に呑まれ、法の常に住する有ること無し。諸王の自在を得、勢力等く雙ぶ無きも、一切皆遷滅す。寿命もまたかくの如し。衆苦は輪際無く、流転して休息無し。三界皆常無く、諸有悉く楽に非ず。道は本性（もと）相有り、一切皆空無なり。可壊の法流転して、常に憂患等有り。恐怖の諸々の過悪、老病死衰悩す。……此の身は苦の集る所、一切皆不浄なり。扼縛癰瘡等、根本は義利無し。上諸天の身に至りて、皆またかくの如し。諸慾は皆常無し。ゆえに我れ貪著せず。欲を離れて善く思惟し、真実の法を證す。究意じて有を断ずる者は、今日まさに涅槃すべし。我れ有の彼岸に度り、一切の苦を出過す。このゆえに今に於て、唯上妙の楽を受く。（純陀品第二・七）

＊『平家物語』の語り出し、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる者久しからず。ただ春の夜の夢の如し。猛き人もつひには滅びぬ……」の趣旨は、この『大般涅槃経』によるものであり、また聖行品一九・下の雪山偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」によるものである。

すなわち、シャカの境界は皆無常である。萬有の本質も相状もまた無常であると、ひたすらに諸行無常相を説き聞かせた。

しかしながら、大弟子ならぬ愛すべき一俗信徒・純陀は凡情あからさまに、

世尊かくの如し、かくの如し。誠に聖言の如し。我れ今所有の智慧微淺にして、けだし蜉蝣（ふんせい）のごとし。何ぞよく如来涅槃深奥の義を思議せん。（同）

と、首を振る。

iii　諸行に同じうすべからず

この一鍛冶工・純陀の思うがままの凡情吐露は、ついに〈法身常住〉の思想を抽き出すとともに、シャカは何故入滅するのか、つまりシャカの死は〈無常垂示〉のため、という意義を打ち出させるのである。

大弟子・文殊師利（Mañjuśrī）は、あられもない純陀の重請を見聞して、これをたしなめ、

汝、今まさに諸行性相を観ずべし。かくの如くに行を観ずれば、空三昧を具す。正法を求めんと欲せばかくの如くに學すべし。

と、諸法皆空の真理に住するの禅定をすすめたが、庶民・純陀は、かかる定型化した空三昧的解決を聴かばこそ、この智慧第一の大弟子に噛みつく。むしろ文殊師利を向こうにまわして堂々の長広舌をふるうのであ

る。

我れ聞く、諸天は寿命極長と。いかんぞ世尊、これ天中天にして寿命さらにちぢんで百年を満たざらん。聚落主のごとき勢自在を得。自在力を以てよく他人を制す。この人、福尽きて其の後貧賤に、人に軽蔑せられ、他に策使せらる。ゆえはいかん。勢力を失するが故なり。世尊も亦しかなり。諸行に同じうす。諸行に同じうすれば、即ち称して天中天と為すことを得ず。何を以てのゆえに。諸行は即ちこれ生死の法のゆえなり。このゆえに文殊、如来を観じて諸行に同じうすることなかれ。……文殊師利、汝、今憶想分別して、如来法を以て諸行に同じうすべからず。（純陀品第二・九）

〈天人〉だって寿命極長と言うではないか。それなのに、シャカが人寿百才にも満たずして、僅々八十才で死ぬとは……。文殊よ、われらのシャカを他の万有と同じに見るとは何事ぞ、と。また、いかにも純陀らしく、世間の話題をとりあげて、巨富の長者に子が生まれたが、人相見が、「この子は短命」と判じたとする。短命では家を嗣ぐことは出来ないとして、「これを視ること草の如くする。」そのように、「それ短寿者は沙門にも、婆羅門にも、男女、大小に敬念せられず。もし如来をして、諸行に同じうせしめば、またまた一切世間の人天衆生に奉敬せられず。」かくの如く、文殊よ、「如来も一切の諸行に同じ」と語るなかれ、と弁じた。そして、

正法を護らんと欲せば、「如来、諸行に同じ、諸行に同じからず」と説くこと勿れ。唯まさに自ら責むべし、「我れ今愚痴にして、未だ慧眼あらず」と。如来の正法は思議すべからず。

と、論じていくうちに、

我れ定んで知りぬ、如来の身は即ち是れ法身。食身と為すに非ざることを。（純陀品第二・一〇）

と、いつしか「微妙の大智を成就し、善く甚深の大乗経典に入」っていた、ということになる。

iv　二施の果報等しくして

実は、これよりさき、純陀は最後の供養をささげていた。この供養の一事が『涅槃経』の佛身論の口火となっていたことを録しておかなければならない。すなわち、四十五年前、シャカが成道直前に、村の二少女から乳糜（にゅうび）の供養を受けたことがあった。そして四十五年後の今、涅槃直前に純陀の供養を受けるのであるが、この二つの供養の意味の軽重は明らかなようである。しかるに、当のシャカは両者の意義に差別なしとする。純陀は異議を申し立てる。

二施の果報差別無しとは、是の義然らず。何を以てのゆえに、先の受施者は煩悩未だ尽きず、未だ一切種智を成就することを得ず。亦、未だ衆生をして檀波羅蜜を具足せしむること能はず。後の受施者は、煩悩すでに尽き、すでに一切種智を成就することを得、よく衆生をして、あまねく檀波羅蜜を具足することを得しむ。云々。（純陀品第二・三）

施食は同一であっても、さきの場合、受施者のシャカはまだ成道以前であり、雑食身・煩悩身・無常身であったのではないか。それに対して、後の場合、つまり今純陀の施食の時は、これを受けるシャカはすでに成道を果たして無煩悩身・金剛身・法身・常身となっている。とすれば、これに対する果報は同じではなく、違うはずではないか……というのである。

それを、シャカは「二施の果報差別無し」と言う。ここまで来れば、すでに見透せようが、ここにシャカが無始常住の佛陀であることが打ち出されている、という仕組なのである。シャカは、あの時、雉陀、雉陀波羅の二牧女から乳糜を受けて後に正覚を得たと肉眼には見えようが、実は無量無辺阿僧祇劫以来、食身・煩悩身を離れて、常身・法身・金剛身であったのだ。それゆえ二施食に差別なし。先きの場合も、「我れ実は

食せず。……我れ今もまた食せず」と述べることになる。このような一件でも「佛身常住」が語り出されている『涅槃経』の工夫なのである。

＊「小乗の阿含部経典の『遊行経』では純陀の施食が入滅を禍いする原因となったのではないことを説かんとして二施の果報無差なりと言ひ、寧ろ重点は涅槃の際の施食に意義あらしむるに在ったのであるが、今、『涅槃経』に於ては、逆に重点を成道前の施食に置き、成道の前の施食が成道後の施食に劣るものに非ざるを説くことによって、二種の施食の果報無差なる根拠を佛性といふ所に発見した。言ひ得るならば、『遊行経』には純陀の罪を救って佛の涅槃を正常視せんとする宗教的情操の発露が見られ、『涅槃経』には同じ二種施食果報無差なる命題によりながら、進んで佛陀の本質探求といふ哲學的思索へ転換せしめてゐると見られないであろうか。ともかく吾々はここに素材を巧妙に転用した『涅槃経』の思想的鋭敏を認めずに居られぬ。」（横超慧日『涅槃経』平楽寺書店、一九八二年、九一、二頁）。

従来、「色は匂へど散りぬるを、わが世、誰ぞ常ならむ」と諸行無常を説く佛教であったものが、今、当のシャカみずから、その無常相をあらわす死の時を借りて、これを逆手にとり、シャカの死は、無常垂示のための方便であり、実のシャカは常住、不変易なることを、これでもか、これでもかと説いて行くのであり、『大般涅槃経』作者たちの妙手、巧者ぶりをうかがうことができよう。シャカの常住を説くには最もふさわしくないと思われる〈死〉の舞台を、かえって逆用しての製作者たちの大胆な作意と、苦心、工夫はいかばかりであったであろうか。

v　諸佛の法爾なり

さて、元のⅲに帰って、シャカにとりすがり、その延命を訴えつづけていた純陀も、ついにシャカの身は

滅失するが、その法身は常住ということで、納得したわけであるが、いざシャカが、「今まさに是れ時なり。如来、正に當に般涅槃すべし。」と告げれば、純陀たまらず、號哭悲咽して、「苦なる哉、苦なる哉、世間は虚空なり」と声をあげ、「我等いま、一切まさに共に五體を地に投じ、同聲に佛を勧めて般涅槃したまふことなからしむべし」と大衆に呼びかけるのであった。

この純陀に、シャカは語りかける。

大いに啼哭して自らその心を乱すことなかれ。まさに是の身は猶し芭蕉、熱時の炎、水沫、幻、化、乾闥婆城（蜃気楼）の如し。……

として、一気に諸行無常相を宣説する。

我れ、汝および一切を哀愍するを以て、このゆえに今日涅槃に入らんと欲す。何を以てのゆえに。諸佛の法爾なり。有為もまた然なり。このゆえに諸佛はこの偈を説きたまふ。

有為の法は、その性無常なり。生じおはりて住せず、寂滅を楽となす。

純陀、汝いままさに一切行雑、諸法無我、無常、不住を観ずべし、此の身は多く無量の過患有り。けだし水泡の如し。このゆえに汝いま啼泣すべからず。（純陀品第二一・一三）

一切の生類に、万有の無常なる理を知らしめんがために、涅槃の相を示すのである、と。ここに到って、純陀はシャカの教えを会得する。なお憂悩を覚えないことはないけれども、と。

是の如し、是の如し。誠に尊教の如し。如来、方便示現して涅槃に入りたまふと知ると雖も、而も我れ憂悩を懐かざること能はず。覆うて自ら思惟して、また慶悦を生ず。（同）

と。

vi　衆生を化せんが為に

以後、この〈方便涅槃〉の思想は貫流して行く。定型化の嫌いがあるが、月喩品第十五には次の喩説が説かれている。以て本経の勘所を知り得よう。

譬へば人有りて、月の現ぜざるを見て、皆「月没す」と言ひて没想を作す。しかも、この月性、実は没すること無きなり。他方に転現すれば、彼処の衆生「復月出ず」と謂ふ。しかも此の月性実は出づること無きなり。何を以てのゆえに、須彌山障ふるを以てのゆえに現ぜず。その月常に生じて、性出没無きが如し。如来・應具・正遍知（シャカ）もまたまたかくの如し。三千大千世界に出現し、或は閻浮提（この世界）に父母有るを示す。衆生皆「閻浮提（えんぶだい）に生ず」と謂ふ。或は閻浮提に涅槃を示現す。如来の性、実に涅槃無し。しかも、諸々の衆生皆、「如来実に般涅槃す」と謂ふ。譬へば月没の如し。善男子、如来の性、実は生滅無く、衆生を化せんが為に生滅有るを示す。（月喩品第十五・一）

月に盈虧出没はあっても、月は常在する。シャカの本性は出没無く、常住である。しかし、その現相は生と滅を顕わし、王子として生まれ、いまや沙羅雙樹の間に涅槃に入るのだが、これらはすべて衆生教化の方便の相である、と。

菩薩品第十六には、

「蛇の皮を脱するが如く、死滅とせんや。」「不なり。」「如来も亦しかなり。方便示現して毒身を棄捨す。如来無常滅と言ふべきや。」「不なり。如来此の閻浮提の中に於て方便して身を捨つ。かの毒蛇の故皮を捨つるが如し。是のゆえに如来名づけて常住と為す。」（菩薩品第十六・二）

というシャカと迦葉菩薩の問答が見えている。

vii　起ちて結跏趺座す

一切大衆所問品第十七の結びにいたるや、ようやくシャカは、

我れいま背疾み挙体皆病む。我れいま臥せんと欲す。

と、言うなり、こどもや重病人のように右脇に臥した。これを眼のあたりにした迦葉は、さすが純陀とは異なった目くばりながら、質する。――すなわち、諸病を免れ、患苦悉く除いて、怖畏無きはずのシャカが、常人と同じように黙然と臥伏するとは如何か、と。これでは、弟子が躓くばかりか、

まさに外道九十五種に軽慢せられ、無常相を生ぜしむべし。かの諸々の外道、まさにこの言をなすべし。「我ら我性、人、自在、時節、微塵等の法を以て、常住にして変易有ること無しとなすにしかず。沙門瞿雲（シャカ）無常に遷さる。是れ変易の法」（現病品第十八・一）

と。外道からも嘲罵されましょう、と。いささか勝った理のうちに、悲しみをこめての設問であった。

これを聞くや、シャカは俄然、

大悲心に薫じ、諸々の衆生の各々の所念を知り、まさに随順して畢意利益せんと欲し、すなわち臥より起ちて結跏趺座す。顔貌熙怡、融金聚の如し。面目端厳、猶し月の盛満のごとし。形容清浄、諸々の垢壊無し。大光明を放ちて虚空に充徧す。……衆生に大智の炬を恵施して悉く無明の黒闇を滅するを得しむ。百千億那由他の衆生をして、不退の菩薩の心に安止せしむ。（同二）

の相をあらわし、

善男子。我れ往昔無量無辺億那由他百千萬劫に於て、已に病根を除き、永く倚臥を離る。……我れいま実に一切の疾病無し。ゆえは如何。諸佛世尊久しく已に一切の病を遠離するがゆえなり。迦葉、是の

諸々の衆生、大乗方等の密語を知らずして、すなはち如来真実に疾有りと謂ふ。（同四）

と、宣言した。そして、真相はかくの如しだが、無常の世に執する衆生に、無常の相を現示さんがためのゆえに、かく重病人相をとった、という趣旨である。

ⅷ　無常垂示のために

そもそも、大聖シャカともあろう者が、年齢八十にして、あわれ病臥して死滅せんとするのか……、その意味は……という問ひに発し、このテーマに挑んだ佛身論では、シャカの超人化・神格化のためには〈任意捨命〉を必須条件としながらも、さきの『法華経』は、衆生に難遭・恭敬の心を生ぜしむるために、方便を以て死して見せた、と強弁した。それは『法華経』製作グループの苦肉の〈妙案〉であったであろうが、いかんせん、説かんがために説いた矮小性を免かれなかった。それにくらべると、この『涅槃経』が思いついた弁解のほうが、まだ自然で、無理は少なかろう。「人よ、いつまでも生くると思うことなかれよ。生命あるものは、すべからく、かくの如く死す」と、身を以て無常相を現示して見せたのである、と。

それにしても、シャカ神格化の極致とも称せられる『涅槃経』――とかく哲学的で論癖にたけた『涅槃経』にしてからが、かくの如き平凡にして平凡なる論決を以てせざるを得なかったということは印象的である。その貧弱さは蔽うべくもない。この上は、ただ「シャカは寿命尽きて死した。」という以外、また以上はあるまい。

この世における人々の生命は定相なく、どれだけ、生きられるかわからない。惨ましく、短くて、苦悩に繋がれている。生まれたものどもは死を逃れる道がない。老いに達しては死が来る。実に生命あるものどもの定めはこの通りである。若い人も壮年の人も、愚者も賢者も、すべて死に屈服してしまう。す

べての者は必ず死に至る。見よ。見守っている親族がとめどなく悲嘆に暮れているのに、人は一人ずつ、屠所に引かれる牛のように連れ去られる。人々が色々と念願しても、結果は異なってあらわれる。期待にそむくこと、この通りである。世のありさまを見よ。(『経集』五七四～五八八)

古経『経集』(Suttanipāta)の声であった。後世の〈神格化〉の工作とは縁なく、万人普遍の死を、みずからのものとしたシャカの声である。飾らず、捏ね回さず、すっきりと死を語ったシャカ自身の声。本来、人生をリアルに生・老・病・死の四苦で直視したその〈人〉の声。〈人〉の死は〈垂示〉のためなどという賢こぶった理屈でなく、そのものずばりであった。

蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ、南北にわしる。高きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり。行く所あり、帰る家あり。夕にいねて、朝に起く。いとなむところ何事ぞや。生を貧り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する所、ただ老と死とにあり。その来ること速かにして、念々の間にとどまらず、これを待つあひだ、何のたのしびかあらむ。まどへるものはこれをおそれず。名利におぼれて先途の近きことを顧みねばなり。(『徒然草』七十四段)

これは仁和寺の兼好の言葉。また、

自分自身の死は、本当に想像しがたいことである。われわれが死について考察する時には、いつもわれわれは観察者として実在していることを理解できるだけである。それゆえに精神分析學は実際には誰もが自分の死を信じないという説、言いかえれば誰もが意識下で自己の不滅を確信しているという説をあえて立てることができた。」(Sigmund Freud: Thoughts on War and Death/Collected Papers. IV. pp. 304. 5)

とは、フロイトの大結論。これを一首に吟じてみせれば、次のようになろうか。

今までは人の事だと思ったに

われが死ぬとはこいつあたまらぬ

（十返舎一九）

ix　キリストと無常垂示

以上、『涅槃経』は、シャカを神格化せんとして、シャカは常住なのだが、衆生に諸行無常なることを垂示せんがため、仮に死して見せたのだ、としてのけたことを見て来たが、これに対して、〈イエス・キリスト〉の死には、〈無常垂示〉の趣旨があったであろうか――。

もとより、聖書には〈人生無常〉の思想は流れている。

世の人に臨むところの事はまた獣にも臨む。この二者に臨むところの事は同一（ひとつ）にして、是も死に彼も死ぬるなり。皆同一の呼吸に依れり。人は獣にまさる所なし。皆空なり。皆一の所に往く。皆塵より出で、皆塵にかへるなり。〈伝道之書三・一三、一四〉

聞け。「われら今日もしくは明日それがしの町に往きて、一年の間かしこに留り、賣買して利を得ん」と言ふ者よ。汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。〈ヤコブ四・一三、一四〉

などなど。イエス・キリスト自身も、〈死〉を忘れて、ほくそ笑む者に、「愚かなる者よ、今宵なんぢの霊魂とらるべし、然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ。」〈ルカ一二・二〇〉と迫っていた。メメント・モリ（死を覚えよ）と。

x　イエス・キリストの死

『涅槃経』はシャカを主役として、人生の無常、人かならず死ぬることを弁じたが、では「なにゆえ人生は無常なのか」、「なにゆえ人は死なねばならぬのか」という設問は全く欠けていた。それは〈大前提〉であって、ただひたすら呑み込まれて行くものとしているのである。死は自然のこと、必然のこととして。

しかるに、キリスト教は〈死〉をもって、自然のこととせず、something wrong とし、〈死〉の起原にまで立ち入っている。〈死〉は「罪の払う値」と究明する。――イエスの死は、シャカの自然死、天命を全うしての死に対するに、〈難死〉、さらに〈刑死〉であった。同じ〈死〉であっても、その〈死〉の様相は全く異なる。シャカの死が〈無常〉なら、イエスの死は〈異常〉であった。

〈シャカ〉の死がおのれの死であり、衆生に無常を〈垂示〉する〈教訓〉の死であったとすると、〈イエス・キリスト〉の死は、人類の罪を一身に背負っての〈贖い〉の死であった。

キリスト教界、万国普遍の『使徒信条』に基づいて言えば、キリストはローマ総督「ポンテオ・ピラトのもとに」〈犯罪者〉として、また石打ちなどでなく、「十字架」の上で、つまり〈呪われた者〉として殺され、葬られたのであり、「陰府に下って」、陰府の軍勢、永遠の死の恐怖と肉弾あいうつ闘争をし、死の恐怖、陰府の苦悩と掴み合いの戦いを通じて勝利し、〈復活〉の凱歌をあげたのである。（カルヴァン『基督教綱要』Ⅱ・16・10、11。）

〈シャカ〉の死と〈イエス・キリスト〉の死と。〈無常垂示〉に対するに〈代償的贖罪〉と。その間のあまりな差異に驚くのである。『ハイデルベルク信仰問答』（Der Heiderbeg Catechismus）は述べる。

（問四二）

それでは、キリストが私たちのために死んで下さった上は、なぜ私たちが死なねばならないのですか。

（答）

私たちの死は罪に対する償いではありません〈ローマ七・二四、詩四九・七〉。そうではなく、それは罪に対して死ぬのであり、永遠の生命の戸口に立つことなのであります〈第一テサロニケ五・九、一〇〉。

（問四三）

私たちは、十字架上のキリストの犠牲の死からさらに、どのような益を得るのですか。

（答）

それは、キリストの力によって、古い私が主と共に十字架につけられ、殺され、葬られ〈ローマ六・六〉、私たちの死すべきからだの悪い情欲が、もはや私たちを支配せず〈ローマ六・一二〉、私たちが主に対して、みずからを感謝の犠牲として捧げるためであります〈ローマ一二・一〉。

〈教訓〉としての死と、〈代償・贖罪〉としての死と。〈シャカ〉の死から得るものと、〈イエス・キリスト〉の死から得るものとの格差のほどに、あらためて頭首を下げざるを得ない。

我等のなほ弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給へり。
それ義人のために死ぬるものほとんど無し。仁者のためには死ぬることを厭はぬ者もやあらん。然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに対する愛をあらはし給へり。かく今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より救はれざらんや。

我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和ぐことを得たらんには、まして和ぎてのちその生命によりて救はれざらんや。

然のみならず今われらに和ぎを得させ給へる我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。

〈ローマ書五・六～一一〉

（次号につづく）